

スピノザにおける「心の強さ」について

黒川 勲

The Significance of “Animi Fortitudo”
in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA, Isao

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第1号

2018年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No. 1, September 2018

OITA, JAPAN

スピノザにおける「心の強さ」について

黒 川 勲*

【要 旨】 スピノザは『エチカ』において「心の強さ」について論じている。本稿では、この心の強さの意義を明らかにするとともに、スピノザにおける実践的な幸福論を実現するための基礎を考察する。

スピノザの挙げる心の強さとは、勇氣と寛大及び道義心と宗教心であるが、それらは意識されたコナトゥスとしての欲望であり、理性の導きによって真の徳となる。また、実践的な幸福論の実際的基礎としては、想像力の活用による、悪しき感情に関して正しい対処法・生活規則を結びつける習慣の形成と、生活規則の想起と同時に人間に与えられた本来的な喜びを想起することが指摘できる。

【キーワード】 心の強さ コナトゥス 想像力 喜び

はじめに

われわれは日常生活において、変転する多くの出来事に翻弄され生きている。そうした混乱による衰弱のなかで、自己の本来のあり方に立ち返り¹⁾、逞しく生きたいと願う。スピノザは『エチカ』において自由である者のもつ「心の強さ (animi fortitudo)」を提示している。

ところで、スピノザ哲学が追求する「至福 (beatitudo)」が「神の知的愛 (amor Dei intellectualis)」において達成されることはよく知られている。確かに、神の内に自らの精神の永遠性を直観的に捉えて得られる神の知的愛は「精神の最高の満足 (summa mentis acquiescentia)」であり、純粋な精神生活において実現される至上の幸福である。一方、スピノザは現実生活における、いわば実践的な「感情の療法 (affectuum remedia)」を説き、われわれを痛める感情からの解放を説く幸福論も展開している。本稿の目的は、この実践的な幸福論が求める人間の心の有り様を「心の強さ」ととらえ、スピノザ『エチカ』における「心の強さ」の意義を明らかにするとともに、スピノザの実践的な幸福論を実現するための基礎を明らかにすることにある。この目的を達成するために、まず『エチカ』における「心の強さ」の具体的な現れである各々の心情の様態を明らかにする。続いて、「心の強さ」の構成条件となる「欲望 (cupiditas)」及び「理性の導き・指図 (ductus rationis・rationis dictamina)」の内実を見て行くことによって、「心の強さ」の意義を全体的に捉えて行く。最後に、「心の

強さ」を行使するための具体的な方途、実践的な幸福論の実際の基礎を明らかにする。

Ⅱ 「心の強さ」が示す心情

1 勇気と寛大

「心の強さ」として、『エチカ』において挙げられる心情は次の言及に見て取れる。

「われわれは、たとえ自分の精神が永遠であることを知らなくても、道義心や宗教心、そして一般的に言えば、われわれが第四部において勇気と寛大に属すると見なしたものを最も重要なものとするであろう。」 [E5P41]

スピノザによって指摘される「心の強さ」の具体的な現れは、「道義心 (pietas)」²⁾と「宗教心 (religio)」, 「勇気 (animositas)」³⁾と「寛大 (generositas)」⁴⁾である。まず、勇気と寛大の内容について確認して行きたい。

勇気と寛大については、『エチカ』第三部定理 59 注解に明確な規定がある。

「私は、勇気を各人がただ理性の指図にしたがって各人の存在を保持しようと努力する欲望と理解する。一方、寛大を各人がただ理性の指図にしたがって他の人々を支え、人々と好意によって結びつこうと努力する欲望と理解する。」 [E3P59S]

勇気と寛大は、欲望の向かう方向によって、自己あるいは他者の方向によって区別される。勇気とは自己の存在に価値を認め、自己の存在を保持しようとする心情である。すなわち、勇気は自らの利益に注目して、それを意図する行為を担う。一方、寛大は他者との友好的結合に価値を認め、他の人の利益をも意図する行為を担うことになる⁵⁾。より具体的には、勇気は「節制 (temperantia)」, 「適度 (sobrietas)」, 「沈着 (animi in periculis praesentia)」の姿を取ることがある [E3P59S]。これらは、自分の生命を大切にするために、例えば健康に関して思慮を欠いた飲食などの過小・過大を避けて適切な程度を保つことがあたるだろう。また、自らの危機に際して、その状況に圧倒され軽率に動揺するのではなく、冷静さを保つことがあたると思われる。一方、寛大は「柔和 (modestia)」, 「慈悲深さ (clementia)」として現れる場合がある [E3P59S]。確かに、他の人々を支え、人々と好意によって結びつこうとするためには、他の人々の同胞として対立的ではなく親和的な心情をもたなければならない。そして、時に他の人々の弱さ至らなさに出会うときは、それらを手当しつつ、それらの人々自身は責めることなく許し容れる心情が必要であると考えられる⁶⁾。

2 道義心と宗教心

続いて、「心の強さ」として挙げられる「道義心」と「宗教心」について見て行きたい。道義心と宗教心については、『エチカ』第四部定理 37 注解 1 が手がかりとなる。

「神の観念をもつ、あるいは神を認識する限りにおいて、われわれが望み、行為し、われわれがその原因となるすべての事柄を、私は宗教心に関係づける。そして、われわれが理

性の導きにしがたって生きることから発する善をなそうとする欲望を、私は道義心と呼ぶ。さらに、理性の導きにしがたって生きる人間が、他の人々と好意によって結ぶためにもつ欲望を、私は礼節と呼び、理性の導きにしがたって生きる人間が賞賛することを品位と呼ぶ。」 [E4P37S1]

まず、スピノザにおいて道義心と宗教心は、「神 (deus)」という人間に対して絶対的な存在との関係が問題となる宗教的な視点において語られる心情である。また、神の認識を前提としてなされる人間のすべての活動が宗教心において発するならば、理性の導きという限定が付されているが道義心からの活動も宗教心に帰せられるものである。さらに、道義心と宗教心は『エチカ』の他の箇所において、「公正 (justitia)」「公平 (aequitas)」「礼節 (honestas)」と一体的に言及されることから [E4, Appendix, Caput15 et Caput24], いわば神の秩序や法を遵守することを善とし、それを行おうとする心情として理解することができる。すなわち、道義心と宗教心とは宗教的な視点において、自らの身勝手な欲求に抵抗し、自他を結ぶ紐帯となる秩序や法を、自らの都合を度外視して尊重する心の強さを意味しているのである。

これまで「心の強さ」が示す感情の内容を確認してきた。それらは勇氣と寛大であり、また道義心と宗教心であった。ここでさらに、これら一対として語られる心情の組み合わせを特徴づけるならば、勇氣と寛大は個人的生活に道義心と宗教心は社会的生活に対応させることができる。すなわち、勇氣と寛大は自己を中心に現実的な自己自身に対して、あるいは実際に出会う具体的で個別的な他者に対してもつべき心の強さであり、道義心と宗教心は自己が属する共同体や社会の宗教的な視点から見られた秩序や法に対してもつべき心の強さである。

Ⅲ 理性の導き

先ほどの『エチカ』第三部定理 59 注解から見て取れるように、心の強さを構成する要因として「欲望」と「理性の導き」がある。すなわち、例えば勇氣は三つの「基本感情 (affectus primarius)」の一つである「欲望」に位置づけられるが、ただし「理性の導き」の下にあるものであった。続いて、心の強さを構成する要因である「欲望」と「理性の導き」がスピノザにおいて意味するところを、とりわけ「徳 (virtus)」の概念に関連づけながら追究して行きたい。

1 欲望と徳

スピノザにおいて、すべての感情は「喜び (laetitia)」、「悲しみ (tristitia)」及び「欲望 (cupiditas)」の三つの基本感情から規定される。そして、特に欲望は「自己の存在に固執する力・コナトゥス (conatus)」に基づいて説明される。すなわち、コナトゥスが精神のみに関係して理解されるとき「意志 (voluntas)」として、精神と身体双方に関係して理解されるとき「衝動 (appetitus)」として、そして衝動が意識されるときコナトゥスは欲望と見なされるのである [E3P9S]。

欲望とは意識されたコナトゥスそのものに他ならない。スピノザは『エチカ』第三部定理 4 一定理 7 においてコナトゥスについて論じている⁷⁾。

「いかなるものも外的原因によらなければ破壊されない。」 [E3P4]

人間も含めすべての存在者は「自然の部分 (naturae pars)」として、他の外的存在から多様な働きかけを受ける存在である。この定理 4 の証明は「定義 (definitio)」と「本質 (essentia)」の概念規定によってのみ行われているが、ものの本質とは「それが与えられれば、そのものが必然的に定立され、除去されれば、そのものが必然的に消滅するようなもの」 [E2D2] である。このことは、本質がものの存在を肯定するのみで否定することはないことを意味する。言い換えれば、そのものが破壊されるとすれば、その原因は本質という内部にではなく、外部になければならない。そして、このような破壊をもたらす外的原因は、一方が他方に対して「対立的本性 (contraria natura)」をもつことになるが、反対に同一のものの内部には対立的な本性は存在しえないことになる。

「ものは一方が他方を破壊しうる限り、対立的な本性をもっている。すなわち同一の主体においては対立的な本性をもちえない。」 [E3P5]

すなわち、ものは「同一の主体においては (in eodem subjecto)」、まさにその本質によって自己の存在を肯定し、かつ自己の同一性を保持するのである。そして、このものの本質の性格は『エチカ』第一部において、存在論的に神から規定されている。すなわち、スピノザにおいてすべてのものは神においてあり、神によって考えられるものであるから、すべての存在者は神の属性 (延長と思维) の「変様 (affectio)」あるいは神の属性を一定の仕方で表現する「様態 (modus)」である [E1P25C]。また、神はものの存在だけではなく、その本質の原因でもある [E1P25]。それ故に、ものの本質は神の属性を一定の仕方で表現していると見なければならない。またこのことは、神の存在と本質が同一であり [E1P20]、同時に神の本質と力が同じものであるという観点から [E1P34]、ものの本質は神が活動する力を一定の仕方で表現していることを示していることになる。スピノザにおける神は唯一の全体的存在者であり、対立するものを内部にも外部にもたない、純粹に自立的で自己同一的な存在者である。そうしてみれば、ものは神の一定の変様・様態として自己の存在を肯定し、自己を保持する力を本来的にもつことになるであろう。

「すべてのものは、それ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努める。」 [E3P6]

このような定理 4 から定理 6 までの考察を踏まえ、スピノザはコナトゥスをものの「現実的本質 (actualis essentia)」とする定理 7 を導き出す。

「それ故に、それ自身だけであるいは他のものとともにあることをなし、あるいはなそうと努める力あるいはコナトゥスは、(この部の定理 6 より) 自己の存在に固執しようと努める力あるいはコナトゥスであり、そのものに与えられた、すなわち現実的本質にほかならない。」 [E3P7Dem]

こうして見れば、意識されたコナトゥスである欲望とは、人間にとって神が活動する力を一定の仕方で表現する自己の本質そのものであり、自己の存在を肯定し、自己を保持する力であることになる。そして、スピノザはこの人間の本質を「力 (potentia)」及び「徳」と等置する。

「徳と力は同じものと理解する。言い換えれば（『エチカ』第三部定理 7 より）、徳が人間に関連づけられる限り、人間の本質そのものである。ただし、自己の本性の法則によってのみ理解される行為をなす力をもつ限りにおいてである。」 [E4D8]

欲望とは力であり、また徳である。しかし前述のように、欲望が真に徳として心の強さとなるためには、心の強さを構成するもう一つの条件である「理性の導き」が必要である。

2 理性と徳

スピノザは、人間が真に徳にしたがって生きることを、「理性の導き」から行為し、生きることであると見なしている。

「われわれにおいて、完全に徳から行為することは理性の導きから行為し、生き、自己の存在を保持すること（これら三つのことは同じ意味である）、加えて自己に固有の利益を追求するという原則から行為することにほかならない。」 [E4P24]

理性は真の認識を担うものとして、人間に関して言えば、人間本来のあり方を指し示す役割をもつ。そして、この人間本来のあり方とは、人間の現実的本質であるコナトゥスが表現する自己の存在を肯定し保持することである。それ故に、理性は人間の本性に対立するようないかなることも要求せず、理性が各人に要求することは自分自身を愛し、自分自身に真に役立つ有益なものを要求すると言われることになる [E4P18S]。

すなわち、理性と徳の関係は、人間の自己の存在を肯定し保持する本質を認識し、その本来のあり方を示す理性が、その「自己の固有な本性の法則に (ex legibus propriae naturae)」 [E4P24 Dem] したがって、人間の自己の存在を肯定し保持する本質的力である徳を導くことにある。理性的に発揮される本質的力が徳であり、徳は理性に導かれてはじめて幸福へと至るための真の力となる。

そして、われわれが幸福へと至るための努力は、すべて理性による「認識 (intelligere)」にかかっているものであり [E4P26]、その認識に役立つものだけが「善 (bonum)」となる [E4P27]。そうして見れば、人間精神にとって最善のこと、最も努めるべきことは理性により本来の自己を認識し、その自己の存在と本質の起源である神を認識することとなる。また、幸福へと至るための真の力が徳であるならば、「神の認識 (Dei cognitio)」を行うことこそが「精神の最高の徳 (summa mentis virtus)」となるのである [E4P28]。

さらに、理性が指し示す事柄は、利己的な狭義の自己保存のためのものだけではない。先に見たように、自然のなかで人間は他の外的存在から多様な働きかけを受ける存在である。しかしながら、人間と他のものとがなんら本質的な共通点をもたないならば、相互交渉は不可能で

あり、相互に無関係なものは善でも悪でもありえない〔E4P29〕。むしろ、それらが共通点をもち、他のものが人間の本性と一致しているならば必然的に善となる。なぜなら、その共通点とは相互に本質的なものであり、それ故に本性上の一致は、自己の存在を肯定し保持するコナトゥスにおける一致していることにほかならず、善なるものとししか考えられないからである〔E4P31〕。この認識を人間相互について見れば、各々の人間は多様な外的原因から刺激され、時に感情において対立し、敵対的でありうるだろう。しかしながら、それは「われわれの本性あるいは本質のみによって説明されない」際に生じる事態である〔E4P33Dem〕。一方、すべての人間は現実的本質であるコナトゥスにおいて共通しており、かつこの点でのみ一致して、理性の導きによって生活するならば、人間相互は常に協調し、共同的になりうるのである。

「人間が理性の導きにしがたって生きるかぎり、人間は本性上、必然的に常に一致する。」〔E4P35〕

そして、善が他の者との本性上の一致、本質的に共通なものに見出されるならば、最も善いことはたんに自己にのみ関係するのではなく、他の者へと広がり、他の者にも関係づけられなければならない。

「徳にしたがう者にとっての最も善いことは、すべての人にとって共通なものであり、すべての人が等しく喜ぶことができるものである。」〔E4P36〕

「徳にしたがう者は、各々が自分のために求める善を、同時に他の人のためにも求めるであろう。」〔E4P37〕

自己の求める善が他の者と共通なものであるならば、自己のためになす努力は、人間共通の努力として、本性上一致する他の者のための努力と同一のものである。すなわち、自己の善の追求は他の者の追求に資する利他的な意義をもつ行為とも考えられる。このことは、理性の導きにしがう限り、善と善の追求において自他は不可分であることを示している。

それ故に、「人間にとって人間より有益なものはない (*homini igitur nihil homine utilius*)」のであり、理性の導きにしがう人々はあたかも「一つの精神、一つの身体 (*una quasi mens, unumque corpus*)」を形成して他の者が欲するものを自分のためにも努力して求めることになる。そして、スピノザはこのような人々をこそ「公正で、信頼しうる、品位 (*justus, fidus, atque honestus*)」のある人々と呼ぶのである〔E4P18S〕。

これまで、心の強さを構成する条件である「欲望」と「理性の導き」がスピノザにおいて意味するところを、とりわけ「徳」の概念に関連づけながら見てきた。心の強さにかかわる欲望とは、意識されたコナトゥスである。それは、人間において神が活動する力を一定の仕方では表現する自己の本質そのものであり、自己の存在を肯定し、自己を保持する力であり、徳を意味するものであった。しかしながら、方向性を欠いた徳をもつだけでは、自由な人間のもつ心の強さとは言えない。そこで理性の導きが要請されることになる。理性は真の認識を担うものとして、人間本来のあり方を指し示す役割をもつ。それ故、理性はコナトゥスが表現する自己の存在を肯定し保持すること、自分自身を愛し、自分自身に真に役立つ有益なものを要求するこ

とになる。すなわち、理性が人間の自己の存在を肯定し保持する本質を認識し、その自己の固有な本性の法則にしたがって、徳を導くことによって徳は真の徳となり、真の心の強さとなるのである。

また同時に、先の理性についての考察は、人間精神にとって最善のことは理性により本来の自己を認識し、その自己の存在と本質の起源である神を認識することであり、神の認識を行うことに精神の最高の徳が発揮されることになることを明らかにした。そして、人間は現実的本質であるコナトゥスにおいて一致しており、理性の導きによって生活するならば、人間相互は共同的でありうること、また共通の善を追求するものであることが示された。そして、心の強さに関連して言えば、この人間の本質に基づく共同性及び共通性故に、社会的生活に対応した心の強さとして道義心と宗教心が挙げられるのである。

IV 実践的な幸福論の実際的基礎

続いて、これまでの「心の強さ」の具体的な現れである各々の心情について、そして「心の強さ」の構成条件となる「欲望」と「理性の導き」についての考察を踏まえて、最後に、「心の強さ」を行使するための具体的な方途、実践的な幸福論の実際的基礎について論述を進めたい。

スピノザは『エチカ』第五部「知性の能力あるいは人間の自由について」を二つの部分に分けている。「現実の生活に関係する部分」（定理 1—定理 20）及び「身体が存在とは無関係に考察される精神に関する部分」（定理 21—定理 40）である。そして、それぞれの部分の議論の収斂される点に「神への愛」と「神への知的愛」が置かれるのであるが、「感情の療法」については特に前半（定理 1—定理 20）で論じられている⁸⁾。そこで、「心の強さ」を行使するための具体的な方途を考察するにあたり、「われわれが感情を完全には認識しえていない間に（*quamdiu nostrorum affectuum perfectam cognitionem non habemus*）」、すなわち感情に対して理性の働きのもとにない間に「われわれがなしうる最善のこと（*Optimum igitur, quod efficere possumus*）」が論じられる『エチカ』第五部定理 10 の言説に注目して行く。

スピノザはこの定理 10 で、「われわれが自らの本性に反対する感情にとりつかれない内は、身体の変様を知性の認識に対応した秩序に秩序づける連結する力をもつ」[E5P10]と述べ、身体の変様の観念である感情を、本来的な秩序に整序する知性あるいは理性の力の存在を説くわけであるが、しかしそれは「われわれが自らの本性に反対する感情にとりつかれない内」に限ってのことである。そうしてみれば、いわばその悪しき感情に対処するために、まずなすべき実際的な手立てが必要となる。この手立てについて、スピノザは次のように主張している。

「われわれが感情を完全には認識しえていない間に、われわれがなしうる最善のことは、正しい生活の仕方あるいは一定の生活規則を念じ、それを記憶に刻み、生活においてしばしば出会う個々の事柄に絶えず適用することである。」[E5P10S]

この主張の要点は、悪しき感情に関して「正しい生活の仕方あるいは一定の生活規則（*recta vivendi ratio, seu certa vitae dogmata*）」を思い浮かべ、記憶し、繰り返してはめる習慣をもつことである。それでは、どのようにして人間はこのような習慣をもつことができるので

あろうか。この問いの解決には、先の定理 10 注解が指示する『エチカ』第二部定理 18 が手がかりとなる。

「もし人間の身体が二つあるいはそれ以上の物体から、以前に同時に刺激されたとしたら、その後に精神は一方のものを想像するとき、直ちに他方のものを想起するであろう。」
[E2P18]

人間は以前に二つのものから同時に刺激され、二つのものについて像を形成したならば、後に一方の像は他方の像を直ちに喚起することになる。そうしてみれば、例えば「不法との出会いによって生ずる憎しみ」と「憎しみを愛や寛大の精神で克服する」という生活規則を再三熟慮して思い浮かべ、しかもそれを繰り返すならば、悪しき感情に関して正しい対処法の概念との接続を習慣としてもつことができる [E5P10S]。スピノザの想像力に関する理解によれば、悪しき感情に正しい対処法を「想像的結合」し、それに「馴染む」ことの「習慣的性格」は、感情の療法に「実践的現実性を与えてくれる」ことになるのである [大西, 2005:172-175]⁹⁾。

確かに、正しい対処法を直ちに思い浮かべる習慣を獲得することは、とるべき方策が直ちに明らかとなり、また手元にあることにもなり、「心の強さ」を行使するために有効であるだろう。しかしながら、より決定的なのはその方策を実行できること、「心の強さ」を行使しうる可能性である。人間は善いものを知り、認めながらも、行為は悪いものにしがう存在である [E4P17S]。また、スピノザにおいて人間は自然の部分であり、外的な要因によって限りなく凌駕され、攪乱される存在である [E4P4 et E4P3]。そうしてみれば、悪しき感情に正しい対処法を常に結びつけうるにしても、同時に方策の実行の際に、外的な要因によって阻害されることがありうる。外的な要因による影響を無にすることはできない状況下においても、方策を実行できる可能性がなければならない。続いて、この可能性を『エチカ』第五部定理 10 注解で述べられる「喜びの感情 (ex laetitiae affectu) から行為への決定」に注目して考察したい。

スピノザはこの定理 10 注解において、悪しき感情に対処する際に喜びの感情から行為へと決定されるように、対処すべき事項に関する「善への注目」の必要性を説いている。例えば、過度な名誉欲を反省し対処しようとするならば、名誉の濫用の弊害や名誉のむなしさの思いからではなく、名誉の正しい使用や名誉を求める正しい目的という善の思慮から改善に向かい行為しなければならない。なぜなら、名誉の濫用の弊害や名誉のむなしさへの思いとは、名誉への欲望がかなえられない悲しみを表現しており、実際には心の奥底に名誉への欲望が強固に横たわっているのである¹⁰⁾。すなわち、名誉欲を名誉欲を抱えたまま改善することはできない。あるいは悲しみから喜びへと向かうことはできない。喜びに向かうためには喜びから行為へと進まなければならないのである。

それでは、「憎しみを愛や寛大の精神で克服する」という生活規則を実行し、まさに「寛大」という「心の強さ」を示すことへ誘う喜びとは何だろうか。スピノザにおいて、喜びは基本感情の一つであり、あらゆるものから刺激を受けることによる想像から生じうるのであるが、「精神は自己自身と自己の活動力を眺めるとき喜ぶ、自己自身と自己の活動力をより判明に想像するほど喜びは大きくなる」 [E2P53] のである。同時に、「精神は自己の活動力を表現するものだけを想像しようとする」 [E2P54] ものである。これらを踏まえてみるならば、人間は生

き存在している、換言すれば自己の存在を肯定し保持する力としてのコナトゥスが現に働いている。まさにその事実において、その事実の認識は自己の存在の肯定と保持する力の自己認識として、自らの存在に基づく本来的な喜びをもたらすのである。そして、人間はこの喜びが本来的なものとして原初的・根源的である故に、常にその喜びをもたらす想像への避けがたい傾向をもっているのである。すなわち、人間には本来的な喜びとそこへと向かう傾向性が与えられているのである。

結語

これまで、スピノザ『エチカ』における「心の強さ」の具体的な現れである各々の心情の様態を明らかにし、続いて「心の強さ」の構成条件となる「欲望」及び「理性の導き」の内実を検討してきた。スピノザによって挙げられる「心の強さ」とは「勇氣」と「寛大」及び「道義心」と「宗教心」である。勇氣と寛大は、欲望の向かう方向、自己あるいは他者によって区別される。勇氣とは自己の存在に価値を認め、自己の存在を保持しようとする心情である。すなわち、勇氣は自らの利益に注目して、それを意図する行為を担う。一方、寛大は他者との友好的結合に価値を認め、他の人の利益をも意図する行為を担う心情となる。また、道義心と宗教心は宗教的な視点において語られる心情であるが、道義心と宗教心は神の秩序や法を遵守することを善とし、それを行おうとする心情として理解することができる。さらに、これら一対として語られる心情の組み合わせを特徴づけるならば、勇氣と寛大は個人的生活に道義心と宗教心は社会的生活に対応させることができる。すなわち、勇氣と寛大は自己を中心に現実的な自己自身に対して、あるいは実際に出会う具体的で個別的な他者に対してもつべき心の強さであり、道義心と宗教心は自己が属する共同体や社会の宗教的な視点から見られた秩序や法に対してもつべき心の強さとして捉えることができるのである。

そして、「心の強さ」の構成条件となる「欲望」及び「理性の導き」について言えば、欲望とは意識されたコナトゥスである。それは、人間において神が活動する力を一定の仕方では表現する自己の本質そのものであり、自己の存在を肯定し保持する力であり、徳を指し示すものである。一方、理性の導きについて、理性は人間本来のあり方を指し示す役割をもつ。それ故に、理性はコナトゥスが表現する自己の存在を肯定し保持すること、自分自身を愛し、自分自身に真に役立つ有益なものを要求することになる。すなわち、理性が人間の自己の存在を肯定し保持する本質を認識し、その自己の固有な本性の法則にしたがって、徳を導くことによって徳は真の徳となり、真の心の強さとなるのである。

最後に、「心の強さ」を行使するための具体的な方途、実践的な幸福論の実際的基礎について次のようにまとめることができる。感情に対して理性の働きのもとにない人間の実際の生活において、スピノザは想像力の連想の力によって、悪しき感情に関して正しい対処法の概念との接続を習慣として形成する実際的な手立てを説く。しかしさらに、「心の強さ」を行使しうる可能性を問わなければならない。その可能性とは喜びの力であり、そしてその喜びは人間の傾向として常に目を向ける、自己の存在を肯定し保持する力の想像から、生じる本来的な喜びなのである。人間は自己の存在を肯定し保持するものとして、それを阻害する悪しきものを避けようとする、だからこそ正しい生活規則を構想するのであるが、多くの外的な要因に攪乱されて善へと着実に進みえない。そこで、まず実際的な手立てとして悪しき感情に関して正しい対

処法概念・生活規則との接続の習慣を形成する必要がある。ただし、さらに生活規則を実行するための動因が必要となる。ところが、まさにその動因は、人間が生き存在している事実の認識から生じる喜びにある。人間は悪しき感情に関して生活規則とともに、自らの存在に基づく本来的な喜びあるいは原初的・根源的喜びを想起することによって¹¹⁾、はじめて「心の強さ」を行使することができる。すなわち、しばしば理性的でない人間の実際の生活において、想像力において、生活規則を手元に引き寄せる習慣を形成すること、そして生活規則の想起と同時に与えられた本来的な喜びを想起すること、これらが実践的な幸福論の実際的基礎として理解することができるのである。

注

- 1) ここで筆者が言う「自己の本来のあり方」とは、スピノザが語る「人間本性の典型(exemplar humanae naturae)」[E4praefatio]を念頭に置いている。スピノザにおいて「われわれは人間本性の典型と見なしてよいような人間の観念を形成しようと欲している」[E4praefatio]、また「人間は自分の本性より力強い人間の本性を考え、同時にそうした本性の獲得に抵抗を認めない」[Spinoza: Tractatus de intellectus emendatione, Opera Bd. II, p.8. (あるいはブルダー版文節番号 13)]のであるから、われわれにとって目指すべき理想が定立されることになる。しかし、「人間本性の典型」という理想は、決して人間本性を超越した理想ではない。スピノザにおいて、人間の本性(完全性)は神の本性の一部をなしており、感覚と想像において失ったこの真実を理性あるいは直観によって認識することで回復することが至福となるのである。それ故、確かに「人間本性の典型」は「理性が想う」理想像ではあるが、現実的な人間の状態がそこから逸脱しているところの「本来的なあり方」を意味し、人間本性に根源的に内在しているものと筆者は考える。
- 2) 道義心と訳した原語は *pietas* である。*pietas* は多くの場合「敬虔」の訳語が当てられるが、本稿では[畠中訳(1975):『スピノザ エチカ(下)』, 訳者注 16, p.142]を参考にした。そこで畠中は『エチカ』において「*pietas* は道義心とか義務観念とかいう語が大体当たるであろう」と述べ、要するに「神を認識し・神を知的に愛する人間一哲人一の *pietas*」であるとしている。確かに、一般的に捉えられる伝統的な宗教においては神に対する敬虔な心情から神の秩序や法を遵守することになるが、スピノザが理性によって構築する神に関する思想(理性の宗教)においては神の秩序や法はより理性化され、この理性的な秩序や法を遵守する *pietas* には道義心とか義務観念の語がふさわしいと思われる。また、河井氏は『神学・政治論』の言説を踏まえて、敬虔と道義心は「実践的な観点に立つ限り、啓示の説く教説と理性の説く教説は一致する」[河井(1994):220]と論じている。従うべき見解である。
- 3) *animositas* の訳語について、本稿では自己に不利益な心の頑強な傾向(たとえば悪癖)に対抗するものとして、勇ましさと心力の強さを表現する「勇氣」とする。
- 4) *generositas* の訳語について、本稿では気高さを強調する「高邁」よりも、他者に開かれ他者を容れる心の広さ・大きさを表現する「寛大」とする。
- 5) 勇氣と寛大を[E3P59S]の記述にしたがって簡潔にまとめると次の表になる。

[表 1] 勇気と寛大

基本感情	関係する対象	心の強さ	心の強さの諸相
欲望 cupiditas	自己	勇気 animositas	節制 temperantia
			適度 sobrietas
			沈着 animi in periculis praesentia
	他の人々	寛大 generositas	柔和 modestia
			慈悲深さ clementia

- 6) ハンプシャーは、寛大を私心のなさの一つの形であり、個人的な利害や小さな世俗的な損得勘定の理性的な軽蔑である、と表現している。[Hampshire (1987) : 127–128]
- 7) 本稿の『エチカ』第三部定理 4–定理 7 についての論述は、[黒川 (2014) : 94–95] の文章を援用している。しかし、文言や表現を変更したところもある。
- 8) ウォルフソンは、第五部の部分構成を「現実の生活に関係する」(定理 1–20)、「身体とは無関係な精神の持続に関する問題」(定理 21–40)、「理性宗教についての一般的言説」(定理 41–42) としている。[Wolfson (1958) : 262]
- 9) 感情の療法について、そして『エチカ』第五部定理 10 については、精緻な論考がある [大西 (2005)]。そこでは、まず「一 定理 10 備考による治癒方法の枠組み」として「想像的結合がもたらす現実的效果」、「馴染みによる想像力の調整」、「方法の枠組み／方法の実質」が論じられている [大西 (2005) : 172–175]。
- 10) 「名誉の濫用やこの世のむなしさについて、最も多く騒ぎ立てる者が、最も多く名誉を欲していることは確かである。」[E5P10S]
- 11) 自らの存在に基づく本来的な喜びあるいは原初的・根源的喜びの想起の習慣づけも重要となる。『エチカ』第五部定理 10 注解の生活規則への言及に模して言えば、「われわれがなしうる最善のことは、自らの存在に基づく本来的な喜びあるいは原初的・根源的喜びを念じ、それを記憶に刻み、生活においてしばしば出会う個々の事柄に絶えず適用することである」。

参考文献

スピノザの原典は次の通りである。

Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters Universitätsbuchhandlung, 2. Auflage, 1972, 4 Bände [Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1925]

『エチカ』: *Ethica*, Spinoza Opera Bd. II (略号 E)

『エチカ』における言及には、その末尾に言及箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理 13 の補助

定理 3 の後にある公理は、E2post P13-L3A2 である。また、D.は定義、Dem.は証明、C.は系、S.は注解を指す。

『知性改善論』: *Tractatus de intellectus emendatione*, Spinoza Opera Bd. II (略号 TIE)

『知性改善論』における言及には、その末尾に言及箇所をブルダー版による文節番号を示す。

スピノザの著作の翻訳にあたっては次の訳書を参考にした。しかし、適宜変更したところもある。

工藤喜作・斎藤博訳, 1980, スピノザ『エティカ』, 世界の名著 30, 中央公論社

畠中尚志訳, 1975, スピノザ『エチカ』上・下, 岩波文庫, 岩波書店

畠中尚志訳, 1968, スピノザ『知性改善論』, 岩波文庫, 岩波書店

大西克智, 2004, 「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(1)ー共通概念の射程と満足の力による支えー」, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集 (23)

大西克智, 2005, 「スピノザ『エティカ』における感情の治癒(2)ー高邁の態勢(disposition)を肖像として念ずることー」, 哲学雑誌 120(792)

河井徳治, 1994, 『スピノザ哲学論攷』, 創文社

黒川勲, 2014, 「スピノザにおける時間に関わる感情」, 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 第 36 巻第 2 号

佐藤一郎, 2006, 「内と外へのまなざしースピノザの哲学への一つの近づきー」, 哲学 (57), 日本哲学会

柴田健志, 2008, 「自由意志の否定は何を帰結するかースピノザの『エチカ』第五部における「感情の治療」, 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, 68 巻

柴田健志, 2009, 「内在的規範の論理ースピノザの『エチカ』第四部における「人間本性の範型」ー」, 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, 70 巻

柴田 健志, 2010, 「スピノザにおける人間の概念ー『エチカ』第四部の「人間本性の型」に関する考察」, 哲学 (61), 日本哲学会

Stuart Hampshire: *Spinoza*, Penguin Books, Middlesex, 1987

Wolfson, Harry Austryn: *The Philosophy of Spinoza*, vol.2, Meridian Books The World Publishing Company, 1958

The Significance of “Animi Fortitudo” in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA, Isao

Abstract

In this paper I tried to understand the significance of fortitude of mind and the possibility of doing practical remedies against the passive emotions in Spinoza’s philosophy. For this purpose I investigated into Spinoza’s arguments of fortitude of mind; courage, generosity, piety and religion in his *Ethica*. Spinoza understands fortitude of mind as “the desire according to the dictate of reason alone”. And about the possibility of doing practical remedies, Spinoza preaches practical use of imagination. We can have a custom that connects the passive emotions with some right manner of living through imagination. And we have the pleasure that arises from the knowledge of “conatus”, our own actual essence of human being. Through the custom and the pleasure, we can do practical remedies against the passive emotions.

【Key Words】 fortitude of mind, conatus, imagination, pleasure